

正義実現委員会には裏の顔がある。

正確には仲正イチカのせいで裏の顔を持っているというべきか。それがこの場所、性技実現委員会だった。キヴォトスの優れた身体能力を持った生徒の中で素行の悪いものやお金に困ってるものたちを集めて戦わせる興行を開く…日常への刺激、自らが夢中になれるものを探して始めた裏稼業ごっこだったが、思いのほか話題になってしまつてやめるにやめれなくなつてしまつていくというのがイチカの本音。けれどもここで自分が放り投げてしまうと悪知恵の回るやつらに似たイベントを開催されてしまうかもしれない。

そんな所まで気をまわしながら、彼女はこのキャットファイト・レズバトルのリングの運営を行っている。

（けどまあ…今日はそんなこと考えてる場合じゃないっすねえ…）

制服を脱いで下着を下ろしながら、イチカは姿見の前に立つ。

普段細めて笑みを浮かべている瞳が、静かに燃えている。均整の取れたプロポーションの節々に緊張感が走り、任務に出動するときよりもヒリヒリしているのがわかる。

「さてうまくやれるんすかねえ…私は。できるっすか？仲正イチカ」

鏡の中に茶化して問いかける。



笑い返す自分の瞳が笑っていないのは、気のせいではなかったらう。

『さあーこのカードが再び実現してしまった！このリングで快進撃を続ける錠前サオリさんを止めるのはやはりこのオンナしかないッ！！！性技実現委員会主宰！！！仲正イチカああああ！！！！』

「サオリ様ーーーー！今日も勝ってくださああい！」

「イチカーーーー！オレの今月の小遣い全部お前に託したーーーー！！！」

うおおおという歓声が響く大きな金網で覆われたオクタゴンの中心、名前を呼ばれた錠前サオリと仲正イチカが下半身を露出させた水着姿で見つめ合っている。

「……」

「ほら、そんな不愛想じゃファンの皆さんがかawaiiそうっすよ。笑顔笑顔」

「そういうのは苦手なんだ……」

「まーまー、少しリング外に視線を向けてあげるだけでもサオリさんのファンは喜びますから」

サオリから向けられる戦意をそういなしながら、イチカはほほ笑みかける。

彼女たちの股間には薬によって本来女性には存在しないもの……巨大なペニスこそそり立ち、怒張した『そ

れ』は獲物を探して鎌首をもたげている。

『ボディチェックも終わったようです！ジャッジがリングを離れたら、ここはルール無用のセックスバトル空間と化します！勝敗予想のベットも拮抗する中、今回は制限時間なしのデスマッチ形式！いき残るのは果たしてどちらか!?』

（――勝手に色々言ってくれるなあ。）

そうイチカは苦笑せざるを得ない。

彼女はかつてサオリとこのリングで戦ったことがある。あのときはキャットファイトからのレスバトルでふたなりではなかったが、終始優位に試合を進められて、なんとか食らいついて引き分けに持ち込んだだけだ。

今回だって自分は出たくはなかったが、サオリとやりたがる挑戦者がいなかったからマッチングに困って自分が出ただけにすぎない。

（興行がしんどいときに見世物になって支えるのがリーダーの仕事ってのはわかってるんすけどねえ…）

錠前サオリの身体能力は、どう考えても自分より優れている。そして勝負根性もかなりある相手だ。負けそうな試合でも勝ち筋を探し、対戦相手への対策を取ってくる。

それはトリニティの治安維持組織に所属し、ツルギ、ヒナ、ネルといった各勢力を代表する最高戦力と同じ

戦場に立った経験のあるイチカにとってもかなり珍しいタイプといえた。もちろんサオリはそうした少女たちに比べて一段落ちる戦士ではあるが、単純に戦う相手と考えたときに嫌な度合いでいえば匹敵すると彼女は考えている。

（そしてそんな相手とやっていると……こっちもなんか火がついちゃうすよねえ）

それが、正直イチカにはサオリと戦いたくない最大の理由だった。

—— 仲正イチカには自分が触れたくない一面がある。

自身の中にある強い凶暴性と暴力的な感情。

それを理性で抑制すればするほど、世界は色あせて見えてしまう。何か趣味をと思つて様々なことを試したが、どれも始めるとそれなりの腕前になると飽きてしまう。そもそも情熱をもつて始めたわけではないので、飽きる飽きないですらないのかもしれない。

なんとなくで始めた以上、真剣に取り組む動機がないのだ。だが一定の水準を超えればそうはいかない。となればそこでやめるしかない。

かろうじて続いているのは先生に褒められたギターくらいである。

しかし、試合となればそうはいかない。

手をあげば興行成績にも影響するし、大きなけがをしてしまうかもしれない。だからある程度はまじめにやる必要があるのだが…

（そうしてると、あの『声』が聞こえてくるから、うーん）

試合に向き合い相手を倒そうと向き合えば向き合うほど、自分の内なる凶暴性が『もっと本気を出したら気持ちが良いぞ』『相手を倒し、蹂躪しろ』と囁いてくる。蛮性の声とでもいうべきその誘惑が彼女には不快でしやうがなかった。

前回サオリと戦ったときもついムキになってその一面を出してしまったが、試合後にどれほど自己嫌悪に陥ったか。

（今回はエッチをするだけっすからそんなことにはならないと思いたいんすけどはてさて…）

リングの上にはもう彼女とサオリしかない。

イチカは自身の思考を振り切るように頬を両手で二回叩くと、リングの中心へ立つ。

そんなイチカの逡巡の内幕をサオリは分かるはずもない。

ただ、向かい合っている相手が試合に集中して向き合えてないということくらいは観察していればすぐにか
かる。

「大丈夫か？」

「へ？」

外には聞こえない小さな声で語りかけると、イチカは驚いたように目を開く。

「なにか問題があるだろうか？」

「ああいえ…こっちのことです。大したことじゃないんで…」

「そうか」

見透かされてるなあと苦笑しながら、イチカはファイティングポーズをとった。

仲正イチカと錠前サオリ。上半身だけ水着をつけて乳房は隠されているが、下半身はすでに脱いでペニスが
向かい合っている。

ペニスのサイズも胸のサイズもサオリのほうが大きい、それだけで性技の優劣が測れるはずもない。

まずは小手調べとばかりにリング中央で立ったまま身体を重ねると。乳房同士をこすりあわせながら、身体をまさぐりあう。

「…んっ」

「はっ…くすぐったいっすよ…んん」

「あっ…うん…」

「ふーん…ッ…！」

経験を積んだ医師であれば触診や打診だけで患者の病変がある場所にアタリをつけることができるという。多くの性経験を積んだふたりはこの抱擁だけで相手の感じる部分を探り当てていく。

イチカとサオリ、身長は4cmほどサオリが高いが、ほぼ対等な目線で相手の様子をうかがいながら互いの吐息を頬に感じながら見つめ合う。

「ンンンッ!？」

「ここ…っすよね？ねえ？」

「そういうお前は…」

「んっ、ちよっああああッ」

サオリの乳首に圧をかけてやると、彼女のポーカーフェイスが崩れる。だが直後にサオリはイチカの股間を太ももで刺激され、腰を震わせた。

——やはりできる。

相手の実力を感じ取ってこの先がただで済むはずがないと覚悟してイチカは立ったまま脚をサオリに絡めた。こうすると陰部が刺激されてしまうが、サオリの好きなように動かれるよりはマシだ。そのまま乳首同士を押し付け合いつつ、自分の有利なポジションを確保しようとする。

「んあ…れろれろ、づちゅううう…」

「ひあっ、や、そこ、は…アアア…!？」

「ちゅば、ん、あむうう。。コあ…コツコツ…」

だが押し込もうとしてきたイチカに対して、サオリはむしろ抱き寄せて耳舐めで反撃をしてくる。自ら密着しに行ったのに、こうなってしまうては面倒だ。だがそれでも、イチカは前と進んでサオリをリング際の金網まで追いやった。

「コお…コツ、ん、コツ…むあ…」

「あう…く、うううう…!!!!」

サオリの舌が耳の内側を這いずる感覚で思わず射精してしまいそうになるが、それをこらえながら乳房を強く押し込むと、まるでマシユマロのようにサオリの乳房が歪んでゆく。

「コッ…んくあああ…くうつ…」

「ふ、ふふ…どうしたんすかあ？舌が止まってるすよ」

「ッ、う…く…この程度で…！」

「あう、ふううウウウ！」

ズンツとサオリの乳首がイチカの乳首を刺し返してくる。金網を背にしたことで押し込まれてるサオリであるが、逆に金網に足をかけて踏ん張ることとそれに対抗した。そうしてふとももを摺り上げると、再びイチカのふたなりペニスがびくびくと震える。

（やっぱり正面からぶつかりあうと消耗戦になるし、このリングでの経験値もかなり高いからサオリさんともどもに当たるのは面倒っすねえ…）

観客受けを狙うならこのまま消耗戦を仕掛けたほうが受けるし、なんならそのような戦いを求めた場合はサオリは正面から受け止めてくれるだろうという確信がある。だがただでさえ面倒な相手に対してそんな非効率

な戦いをする気にはなれない。

（今、サオリさんはこっちに押し返して反撃してきてる。だとするなら…）

思案を巡らせた瞬間、イチカは一步だけ後ろに退いた。サオリの反撃にたまらず後退したように観客には見えなかったかもしれない。だがその動きにサオリが前へと重心がずれたのを見計らい、イチカはサオリの裏に開いたスペースにまわりこんだ。

「しまった!？」

「捕らえたっすよ」

逃れようとするサオリの乳房とペニスに手をまわして少し強く握ると、サオリから「ふああ!？」という喘ぎが漏れて一瞬動きが止まる。

「逃がさないっす。ここで何発かヌかせてもらおうっすよ」

言うが早いか手でサオリのふたなりペニスをしごき始めると、サオリは何とかがして振りほどこうとするが、後ろに回り込まれているため思うようにいかない。

イチカも腰に力を入れてサオリの体につかまるが彼女の体力への負担よりも、すでに息が上がっているサオリのほうが苦しそうだ。

「ふーっ、ふーっ、ん、ぐうう……!」

「ほら、もう限界なんじゃないっすか。そろそろイっちゃうんじゃないんっすか?」

「んっ、くう……この……!」

「ふふふっ」

イチカの口から思わず笑みが漏れる。サオリのペニスからは先走り汁が漏れ、潤滑油となってゆく。男性器とはこんなに反応がわかりやすいものだ。快感に対して嘘をつけない。

「は、ん、ふうう……あ、ああ、く、くうッ……!」

イチカの手の動きが速まり、サオリは徐々に追い詰められていく。そしてついに限界を迎えたのか、サオリの腰がガクンと落ちた。

「あ、く、あああ!?!いつぐううウウウー……………!!!!」



ビュルルルルーーーー！！とサオリがイチカの手の中で大量に精液を撒き散らす。そして収まりきらなかった部分がリングにはねて白く汚した。

「これでまず一発…さ、次いくつすよ」

「んぐ…うううう!!」

イチカはサオリの上に馬乗りになると、まだ絶頂の余韻に震えるサオリのペニスに顔を近づけた。

「ふふ、おいしそうなおちんちんっす」

自分の顔以上に大きいペニスに手を伸ばして何度かしごき上げると、先ほどまでの柔らかさはどこに行ったものか。すぐに硬度を取り戻したサオリのペニスに舌を這わす。

「うあああ、く、やめ…」

「ほくら、ちろちろ、ちろちろ…イカ臭い香りもこうなると悪くないっすね…」

「ぐうううう、くうううう!!!」

「気持ちいいのを我慢してるんすか？それとも悔しがってるんすか？ま、どっちでも結果は同じかな…」

「ふぐ……や、やめ……あうう」

手で亀頭の先端を包みこみながら尿道口を指でほじると、サオリの腰が震える。イチカはさらに竿の部分に手を添えながら玉袋も同時に揉んでゆく。

「ふうう……く、ああ……!?」

快感に身をよじらせるサオリ。それに構わずイチカはフェラを続ける。時折先走り汁を吸い取るように強く口をすぼめると、サオリは思わず腰を浮かしてしまう。

「んふふ、また出ちやいそうっすか?でもまだダメっすよ」

「ぐうう!!ふぐ、ううう!!」

サオリは必死に堪えるが、イチカは容赦なく責め立てる、舌を突き出して肉棒の割れ目に沿って上下させるたび、サオリの腰が跳ね上がった。あともう少しで限界に達してしまうのは目に見えている。

「こ、このままでは……また……ッツツ!!!!」

「ふふふ、もう限界っすか?じゃあそろそろ………いっちゃいましょうか?」

「はっ、ぐ、くうううう。ああああ、イ、いくうううう!!!!」

対応される前にもっと畳みかけてサオリの反撃の芽を摘まなければならない。そうふたなりペニスの裏にあるヴァギナに指を伸ばしたとき

「ひ
い
い
い
い
い
い
い
い
イ
イ
イ
イ
イ
!?」

「これから私の番だ」

「れええええつろ…」

サオリはそのまま舌を奥へと挿入すると、膣壁を押し広げるようにグラインドさせた。

「ちゅぱ……ちゅるるるるっ、れろオオ」

「あつ、んん……くうう……!!」

思わず喘ぎそうになるがなんとか耐えるイチカ。その間にもサオリの愛撫は続いており、秘裂の入り口を丁寧になぞっていたが、徐々に舌を奥の方へと侵入させていった。イチカは歯を食いしばって堪えるが、それでも甘い吐息が漏れてしまう。サオリが本気でイチカをイカせようとしていることは明らかだった。

「ぐ、ぐうう……そ、そうは、うっ!?!、させないっすよ……!!」

ならばとイチカは、サオリの睾丸からラヴィアまでを優しく撫でるように指を動かしてゆく。その間もサオリの舌がイチカの性感帯を的確に捉えて離さないため、その動きは遅くなりつつあるが。

「あむっ、ぐちゅう、ぐちゅう、ぢゅるるうう……れろれろお……んぶっ、ンムうう……」

サオリは舌で掻き出すようにイチカの愛液を飲み干し、再び吸い上げる。そして空いている片方の手でイチカのペニスを掴むと、激しく抜き始めた。

「ふあ、あ、あああっ!!」

急激に襲ってきた二種類の快楽に、イチカの腰が砕けそうになる。サオリはその隙を逃さず、更に強く吸引する。イチカはその強烈な刺激に耐えきれず、絶頂を迎えてしまった。

「ひっ、あああああああ!!」

腰を大きく弓なりに仰け反らせ、潮を吹き出した。あまりの快感に全身を痙攣させ、意識が飛びかける。しかし、サオリは休ませてくれない。イチカが意識をはっきりさせる前に次の行動に移ったのだ。

「ふん、まだまだこれからだぞ」

「ま、待つっす……んぐう!」

抵抗しようとするイチカだったが、サオリは無理矢理彼女の唇を奪う。混乱するイチカだが、すぐにサオリの舌の感触を認識すると、彼女はそのままサオリの唾液を受け入れるように舌を絡ませ合った。

「ちゅ……ちゅぱ、んむうう……ふふ、可愛いな」

「や、やめ……はあん……!!」

キスをしながらサオリはイチカのクリトリスを摘み、指先で弾くようにして刺激を与えてゆく。それと同時にイチカのペニスを握み、上下に動かすと、イチカはすぐに絶頂を迎えることになった。

「はぐ、くあああっ!？」

「ちゅ……ぢゅるる……」

イチカの愛液がリングに飛び散ると同時に、サオリはイチカの乳首を吸い上げた。イチカはまたしても絶頂を迎えると、サオリの腕の中でがっくりと脱力してしまった。

「く……うう……!？」

何とか起き上がろうとするが、何度も絶頂を迎えた影響かうまく力が入らない。しかし、そんなイチカの状態などお構いなしにサオリはイチカの体を起こすと、再びディーブキスを開始した。

「むぐう、ふううンン……んむうう、ふむううう、んちゅ、レロレロ、むぢゅうう」

「んむうう、んぷうう、ふああ……ンン……!!」

主導権を握るつもりがむしろ押し込まれてしまったイチカはこの状況をなんとかしようとするが、すでに度重なる絶頂と快楽によって思考がまとまらない。

（——うるさい。黙れ）

心の中で、何かが騒いでいる。サオリに犯されてぐちゃぐちゃになっている中で、何かが衝動に身をゆだねると騒いでいる。

（ここは私が…私がやるんだから）

そんなイチカの葛藤も知らないサオリは、唇を話すと、抵抗の弱まったイチカに背を向けさせると、金網に押し付けるように背面立位…いわゆる立ちバックの形でつながった。

「ああああアア!?」

「だいぶ出来上がっているようだな」

「そ、そこはア!!!!うううう」

「水着の上からでも乳首が屹立しているぞ?」

「ふああああ、イイイイ——ッ!?!」

水着越しに乳房を揉みしだかれ、イチカが吠える。快感を逃そうと金網にしがみつく姿はむしろサオリにとっては征服欲を満たす光景でしかない。

「くう、ふううん…あああ、やぁあん……!!」

サオリはイチカの尻を鷲掴みにしながら、激しく腰を打ち付けてゆく。イチカは快楽に吞まれ、喘ぎ声を上げ続けるしかできない。その度にリングに飛び散る汗と潮と精液が混ざったものが辺り一面を濡らしていく。

「くう、ふうん…ああ、やぁんツ……!!」

サオリはイチカの腰を持ち上げると、更に深く挿入した。そしてそのまま激しいピストン運動を始める。

「あっ! ああああああっ!」

「ふふ、随分乱れているようだな。だが、まだ終わらないぞ?」

「ひっ!? ダメっす! あアアア!!」

サオリはイチカの耳元に口を近づけると、そう囁く。



「んふう、ちゅばあ……れろれろ……ちゅばあ……んふう、ちゅばあ……」

「ひぐうう！！！！みみやあ……ああつ、ひいいイイイイイ……」

耳たぶをしゃぶり、そのまま首筋へと舌を這わせる。その間もサオリの腰使いは激しさを増しており、イチカのペニスからは透明な液体が流れ出し、リングを濡らしていた。イチカはサオりに支配される喜びを感じ始めていた。自分より大きな相手に組み敷かれることで得られる被虐的な快感に身を委ねてしまっていた。

「ふふ、そろそろ私も出すぞ？」

「ふあ、ふああああ……ふぐう、ううンン!？」

「あああああっ！！！」

最後に思い切り奥を穿たれ、イチカは絶叫した。同時にイチカは潮を吹き出して果ててしまい、サオリはその勢いのまま、精液を注ぎ込む。熱い奔流が膣内に広がる感覚に、イチカは恍惚とした表情を浮かべていた。

「く、ふうう……！！！」

「はあ……んん、うぐ……ッ」

サオリのペニスがイチカの中で何度か痙攣すると、ドロリとした白濁液をあふれさせながら引き抜かれた。

（ああもうこのままゲームセットっすかねえ…ねえ…?）

そんな諦観がイチカの中にうずまく。だが一方で、イチカは自らの中にくすぶる熱も感じていた。

（それで…良いんすか、ねえ?）

「ふう…」

小さく息を吐いたサオリはイチカにとどめをさすべくリングの中央でフィニッシュを決めようとした。ぐつたりとした彼女を抱き寄せると…

「————ッ!？」

「うん?どうしたんすか?」

ガラガラとした視線でイチカが自分を見つめている。これは…以前戦ったときと同じだ。

——仲正イチカはどこかで自分の力を抑え込んでいる。

それが錠前サオリの分析だ。どうしてそうする必要があるのかは分からないが、イチカ自身がそうした直接的な戦闘スタイルを好んでいないことは明白だった。しかしこうなると違う。これは攻め方を誤ったか？そう判断したサオリだったが、その思考が中断されてしまう。

「えい」

「ぐうっ!？」

足を引っかけられて転倒させられ、押し倒されてしまう。

「…さんざん好き放題やってくれたっすね？」

「……」

「今度はこっちの番っすよ。ほら、こんなモノもう邪魔っす」

なんの小細工もない正常位。自分の水着を脱ぎ捨て、サオリの破いたイチカの怒張したふたなりペニスがサオリに押し当てられる。さすがに今の体勢を変えなければ。そうサオリが思った瞬間

「いくっすよ」